

人文会 ニュース

jinbunkai news

August 2024

NO. 147

1 代表幹事挨拶

片桐幹夫

2 15分で読む

母語の狂気から他者の単一言語使用へ

—— ジャック・デリダの(非)フランス(現代)思想入門

宮崎裕助

17 書店現場から

独立書店小史

和氣正幸

22 図書館レポート

これからの図書館に必要なこと

丸濱晃一

33 編集者が語るこの叢書・このシリーズ 30

未知の沃野を掘りおこす

——〈アジア文芸ライブラリー〉のいままでとこれから

荒木 駿

委員会活動方針

人文会活動報告

人文会年次総会報告



www.jinbunkai.com

20世紀の『戦争と平和』
彩り豊かな人間の物語

スターリン グラード

全3巻



ワシーリー・グロスマン 園部 哲 訳

『人生と運命』の前編となる全3巻。チェーホフを思わせる詩情、人物と心理、情景の描写、戦争の現実が胸を打つ。文学史上の金字塔。 ●各5,390円

白水社 東京都千代田区神田小川町3-24
tel.03-3291-7811 ●価格税込

渋沢栄一 守屋淳 訳・注解

詳解 全訳 論語と算盤

生き方の芯となる！

いま立ち返るべき最強の古典

道徳と経済の両立を説き、時代を超えて読み継がれる国民的ベストセラーの現代語完全訳。

詳細な解説と注を付し、より深く学べる決定版。

定価2200円 ※電子書籍も配信中

筑摩書房

営業部 03-5687-2680
*定価は10%税込です。

<https://www.chikumashobo.co.jp/>

保坂 亨

学校と日本社会 と「休むこと」

「不登校問題」から「働き方改革」まで



教育現場や社会を取り巻く「皆勤」の空気と、ワークライフバランスを教育相談の第一人者と考える。

3,190円(税込)

東京大学出版会

〒153-0041 東京都目黒区駒場 4-5-29
TEL 03-6407-1069 FAX 03-6407-1991
<https://www.utp.or.jp/>

池上彰と学ぶ ロシア・ウクライナの歴史地図

池上彰 監修 / 地理情報開発 編

別冊太陽 スペシャル
プーチンはなぜウクライナに侵攻したのか？
ロシアという国家はどうやってできた？
両国の物語を地図と写真でヴェジュアルに解きほぐす。戦況を追い続ける池上彰の解説つき。



B5判 定価2200円(10%税込)

平凡社 〒101-0051
東京都千代田区神田神保町 3-29
tel 03-3230-6573 fax 03-3230-6587
<https://www.heibonsha.co.jp/>

代表幹事挨拶

みずず書房 片桐幹夫

2024年5月17日に行われた人文会年次総会において、代表幹事を拝命しました。どうぞよろしくお願い申し上げます。

他の役員人事として、すべての幹事が再任となりました。今後1年間、会の運営を担うこととなります。また、各委員会の副委員長は、〈販売・企画〉〈広報〉委員会が再任、〈調査・研修〉委員会の副委員長に東原亮佑氏（勲章書房）が新任されました。

一方、残念ながら、日本評論社が二年目の休会になりましたことをご報告いたします。

書店、販売会社、出版社共に激動の変化の渦中にあります。しかし、人文会は人文書を販売する意義を引き続き強くお伝えするとともに、読者の皆さまに人文書の奥深い楽しさをさらに知っていただくために、今日の状況に即した手法で、積極的な活動を行っていく決意を新たにしています。

昨夏にリリースいたしました『人文書販売の手引き』の第3版（WEB版）は、多くの書店、流通関係者の皆さまに好評をいただきました。大規模な研修会も複数回実施し、その後の多様な施策に結びついています。研修時に私たちが感じることは、厳しい状況にありながらも、なんとかお客様に期待に応えようとする書店の皆さまの強い情熱です。私たちは志を同じくする皆さまと、真摯な議論を重ね、力を合わせれば、様々な課題を乗り越えていくことができるかと確信しております。どうか人文会担当者を「共に走るパートナー」として、お気軽にお声かけください。

本年も、役員、各委員へのご指導・ご鞭撻を何卒よろしくお願い申し上げます。

母語の狂気から他者の単一言語使用へ

—— ジャック・デリダの（非）フランス（現代）思想入門

宮崎 裕助（専修大学教授）

二〇二四年の今年はジャック・デリダ没後二〇年にあたる。専門家向けではない文章でデリダに言及する場合、「現代フランスの哲学者ジャック・デリダ」と簡単に紹介することがある。いちいち説明する紙幅がないときにも「現代フランスの哲学者……」という肩書きでどういう人物かを最小限知ってもらう、あるいは思い出してもらうためである。他の例を出すならば「古代ギリシアの哲学者」アリストテレス、「イタリア・ルネサンス期の芸術家」レオナルド・ダ・ヴィンチ、といった具合だ。

しかしこのような肩書きは当の人物について知っていれば知っているほど説明不足、それどころか不正確に感じるだろう。とりわけデリダはそうだ。「現代」「フラン

ス」「哲学者」すべてに留保をつけたくなくなる。「現代」といっても、亡くなったのは二〇〇四年、いま現在という意味ではない。「哲学者」といっても、デリダは「哲学」という学問分野、この名が担う学位制度を根本から疑問に付したのであり、「反哲学者」とすら言いたいところだ。

もちろんそのような留保をひとつひとつ説明していたら、簡明でなくてはならない肩書きは意味をなさなくなる。しかしそれでも、デリダを「フランスの」と呼ぶことには何重にも留保を付さなくてはならない。デリダはフランス語を操り、フランス市民であったが、デリダをたんに「フランス人」と呼ぶことはできない。そしてそ

のことはデリダ自身の思想とけっして切り離しえない背景をなすものであるということを強調しなくてはならない。ここでは、デリダの出自に関連するところをたどり直すことを通じて、デリダの思想の核心に迫っていくことにしたい。

ユダヤでも反ユダヤでもなく

デリダは一九三〇年、当時はフランスの植民地だったアルジェリア主都アルジェ近郊のエル・ピールに生まれた。アルジェリアが戦争を経て独立したのは一九六二年であるから、デリダはフランス領アルジェリア生まれということになる。デリダの家系は、スペインにルーツをもつセファルディムのユダヤ人であった。当時のアルジェリアはたんなる植民地ではなかった。というのも、フランス本土からの入植者(コロン)だけでなく、同化政策を通じてユダヤ人や一部のムスリムにもフランス市民権が与えられていたからである。この点で、当時のアルジェリアのユダヤ人は、フランス市民権をもたない先住民、大半のムスリムであるアラブ人やベルベル人とは異

なる特権を有していた点に留意すべきだろう。

そうしたユダヤ人にフランスの市民権を与えていたのが、一八七〇年に施行されたクレミュー法である。これによってアルジェリアのユダヤ人は、最下層の圧倒的多数を占めるムスリムのアラブ系アルジェリア人とは違い、同化フランス人としての権利を得ることができた。他方、フランス人入植者からすれば、これらのユダヤ人は、アルジェリア先住民の一部にすぎず、古くから残存していた反ユダヤ主義の矛先が向けられる対象であることにかわりはなかった。

その反ユダヤ主義がかつてないほどに露見したのは、クレミュー法施行から六〇年後、一九四〇年に生じた、クレミュー法の廃止による。同年ドイツ占領軍によってパリは陥落しており、フランスではペタンを首班とするヴィシー政権が成立していた。この政権のもと反ユダヤ法が制定され、フランスでは反ユダヤ主義の嵐が吹き荒れたのであった。とりわけクレミュー法の廃止は、アルジェリアのユダヤ人の立場を一挙に危うくするものであった。当時デリダはまだ一〇歳の子供だった。

クレミュー法は三年後のその年、すなわち、第二次世

界大戦でナチス・ドイツが劣勢となり、連合軍のアルジェリア上陸後、フランスのレジスタンスが奏功しつつあった一九四三年には復活した。しかしながら、アルジェリアのユダヤ人にとって、クレミュー法の廃止はフランス市民権の剝奪にほかならず、少年デリダはすでに、フランス教育を施す学校から追放されるという憂き目にあっていた。デリダはそのときのことを次のように回想している。

私はそのことをまったく予想していなかったし、何もわかりませんでした。その当時、私のなかでいったい何が起こったのかを思い出そうと努力してみるのですが、駄目です。なにしろ私の家ではどうしてこうした事情になったのかを説明してくれなかったのですから、一人のドイツ兵もいなかっただけに、アルジェリアの多くのユダヤ人にとってそれはなおさら理解しがたいものであったと思います。しかもそれは、フランス本土でよりも厳しかったフランスのアルジェリア政策による率先した行動だったのです。

『言葉ののって』一八一―一九頁

もともとクレミュー法に反対していた反ユダヤ主義者の勢いが増した結果、デリダはこの法令の廃止によって、当時ナチスに追随していたフランスという国家全体から差別を受けることになったのである。

他方で「何もわからない」まま放校されたデリダが、アルジェリアのユダヤ人共同体に自分の場を見いだせたかというところがなかつた。デリダは、ユダヤ人教師たちが集まっていた地元の高校に登録したが、その閉鎖的な雰囲気にもったく馴染むことができなかった。サッカー選手になりたいという夢を抱きながら、スポーツに明け暮れ、一年間授業をサボっていたという。「そのころ、学校に行くというのは、鞆のなかにサッカーシューズを入れて出かけるという意味でした」(同書、二二頁)。

そもそもフランス市民として教育を受けていた一二歳のデリダにとって、いまさら「土着のユダヤ人たちの」因習的な儀礼を受け容れるのは耐え難いことであつた。デリダはこう述べている。「私は、そうした共同体のなかに閉じこめられることに我慢がならなかつた。それゆえ、私のうちに「そうした共同体との」深い情動的な断絶が生じていた」(「」内は引用者による補註。以下同じ)。そ

の一方で、当時のアルジェリアで高まっていた反ユダヤ主義による人種差別に思春期のデリダは日常的に苦しんでいたということも事実だ。デリダによれば「私は、反ユダヤ主義や人種差別主義のあらゆる示威行動に極度に傷つきやすくなり、とりわけ子供たちの側からしょっちゅう沸き起こっていた悪口にひどく敏感になりました。そうした暴力はいつまでも私の記憶に焼きつきました」（同書、二二頁）。

反ユダヤ主義からは当然のこと、かといってユダヤ人共同体には安住できず、そこから逃れたいというこの両義的な感情、それがおそらくはデリダの政治的な感覚のなにか中核なものをなしている。

孤独の感情や願望、あらゆる共同体にたいして、さらにはあらゆる「国民性」^{ナシヨニテ}「国籍」^{ナシヨニテ}にたいして身を引きたいという感情や願望、そして「共同体」という言葉そのものにたいする不信任はたぶんその時期に始まっています。少しでも過度に自然で、庇護を押しつけ、融合を生むような帰属関係が形成されるのを目にするやいなや、私は姿を消すのです……。それは、私に特有

なその時期の後遺症ですが、今日では、より一般的な倫理を正当化しうるものです。（同頁）

ユダヤでも反ユダヤでもなく。その両義的感覚は、デリダ自身の幼少期の体験から生まれたものだ。しかし重要なのは、その感覚がデリダという人物の個人史に還元することはできず、まさにデリダのいう「より一般的な倫理」につながっているという点である。そこをさらに掘り下げてみよう。

アイデンティティ・トラブル

デリダは一九歳のとき、高等師範学校の受験準備のためにパリに行くことを決意し、アルジェリアを発った。デリダにとって「フランス」ないし「フランス本土」こそ、アルジェリアの反ユダヤ主義にもユダヤ人共同体にも行き着かない、まさにその第三の道を指し示してくれるはずであった。デリダが述べるには「私は純真素朴に、フランスでは、とくに知的ないし学問的な世界では、反ユダヤ主義の出る幕はないと考えていました」（『来たるべ

き世界のために』(一六六頁)。

しかし事態は単純ではない。そもそもアルジェリアのユダヤ人にフランス市民権を与えたり与えなかったりした当の国家こそ、このフランスだからであり、そのせいで少年デリダは、フランス市民権をもともたなかった現地のアラブ人たちから隔てられていた一方、先に述べた反ユダヤ主義とユダヤ人共同体との両義的関係のなかで苦しむことになったからだ。

そして、そんなアルジェリアのユダヤ人がフランス本土でいっそうの葛藤に遭遇しないはずはなかった。出生の土地においても血統においても文化的な帰属においても、そして言語においても、フランスのフランス人たちと異なる者として、デリダは、みずからの出自をなすユダヤ人共同体が、三重の分離を被ったものであるということ¹を回顧して指摘している(「他者の単一言語使用」一二三―一二四頁、以下、丸括弧内の漢数字は本書のページ数を指す)。

1 アラブないしベルベルの言語と文化からの切断。

2 フランス(ひいてはヨーロッパ全体)の言語と文化からの切断(フランス本土からの文字通りの分離)。

3 ユダヤの記憶からの切断(当時アルジェリアで実践さ

れていたユダヤ教の儀礼は、世俗的なフランスに、さらにはキリスト教に「汚染」されており、「カトリック」を模倣していた。

晩年のデリダは、一方でアルジェリアのユダヤ人として反ユダヤ主義に抵抗しつつ、ユダヤ人共同体からも距離を置きながら、他方で、フランス国民として本土のフランス人にはとうてい自己同一化できない状況を語るようになる。ノスタルジェリア(「ノスタルジー(郷愁)」と「アルジェリア」との鞆語)とデリダが呼ぶその記憶は、たしかに、デリダ自身の境遇からくる「同一性障害」(二八頁)を表していた。

デリダはこの問題を個人的な挿話にとどめてはいない。デリダが「ノスタルジェリア」に言及している著書『他者の単一言語使用』は「母語」の問いを提起しており、デリダ個人の境遇が強いた「障害」を起点としながら、「母語」という問題含みの概念のうちに、文化の普遍的な構造にひそむ範例的な意義を明らかにしている。この問題提起は、デリダがたんにフランス人ではありえなかったことだけではなく、ユダヤ性にたいするデリダの両義的な感覚、共同体というものへの不信感を裏づける

「より一般的な倫理」(前出)を説明するものとなるだろう。

三重の同一性から切り離されたデリダにとって、最後に残っているようにみえるのは、自意識が育つ以前から自分が話していた言葉である。通常それは「母語」と呼ばれる。「幼児期に周囲の大人たち(特に母親)が話すのを聞いて最初に自然に身につけた言語(『大辞林』と辞書では説明されている。それは、私の住み処をなし、それ以前に私の成立そのものが考えられなくなるような、疑いの余地のない乗り越えがたい環境^{エンヴェロン}である。デカルトなら「コギト」(考える私)と呼んだような、思考の唯一確実な基盤であるべきものだろう。

しかしながら、まさにそうした私の基礎となるようなひとつの言語が存在するということが、母語として自然にひとつの言語を使用するということが、そうしたことにたいして、デリダは根本から疑問を投げかけている。はたして母語≡私自身であることを保証するようなひとつの言語は存在するのだろうか。そもそも私たちにとってそのような母語は存在するのだろうか。そのようなひとつの言語はあるのだろうか。

デリダがこの問いを投げかけるのは、次の命題を提示

することによってである。「私はひとつしか言語をもっていない、ところがそれは私のものではない」(二四頁)。これが、デリダの主張の根幹となる「他者の単一言語使用(Le monolinguisme de l'autre)」テーゼである。以下、このテーゼを、デリダの込み入った議論を適宜解きほぐしつつ、展開することにした。

母語は母国語ではない

もし先に述べたように、ひとは母語をひとつの言語として自然に身につけており、それが「私」の言語使用の基礎をなしていると考えられるならば——それはたしかに常識的な母語の理解である——それは「私の単一言語使用」である。反対に、デリダが主張しているのは「たしかに私はひとつの言語を使用しているが、それは私のものではない」という事態である。

まず単純な事実として、私の言語は自分自身でつくり出したものではなく、他者(親や家族)が使用しているものに由来している。つまり他者から受け継いだ言語だ(私のものではない言語)である。そもそもそのように

共有されるものでなければ、自分にしか解読法がわからない暗号のメモ書きのようなものとなり、ただちに他者に理解され返答を期待できる言語にはならないだろう。つまり、当の言語を用いて互いに意思疎通することは困難になるだろう。

とはいえデリダは、言語のそのような水準をただ主張しているのではない。先にみたデリダの伝記的な事実からわかるように、まさにデリダにとってフランス語は、単純な意味で「母の言語」「私の言語」となったわけではなかった。たしかにデリダは家族が話していることから「自然に」フランス語を身につけたのだろう。その意味では「母語」はフランス語だが、しかしマグレブ（北西アフリカ）のフランス語話者、とりわけアルジェリアのユダヤ人にしてみれば、そうした「自然性」自体が実のところ歴史的産物、もつと言えば、フランスという国家の同化政策の産物なのだとすることを忘れてはならない。デリダにとって、私の言語、私の母語は、生地のアラビア語やベルベル語でもなく、家系のユダヤ人が用いるヘブライ語でもなく、フランスというまったくの他者の言語だった。フランス市民権をもち、フランス国家の教

育を受けていた者として、他者の言語を強制されていたのであり、そのような「植民地的本質」（五六、九三頁）によって、私の単一言語使用は、私のものではなかったのだ。

これは、デリダのケースを特殊な境遇と考え、そうした場合のみ当てはまることだと考えてはならない。そもそも母語（mother tongue）が、母国語（national language）と異なるという点はいくら注意してもしすぎることがないほど重要な区別である。たとえば、在日朝鮮人にとっては、母語が日本語であっても母国語は朝鮮語である。日系ブラジル人にとっては、母語が日本語で母国語がポルトガル語である人が多数だ。また次元は異なるが、言うまでもなく両親の国籍が異なり、二カ国語併用使用の家庭では、そもそも母語≡私の根拠となる単一言語とは限らないというケースになるし、そうした状況はけっして珍しくない。

母語と母国語が一致すると考えられる場合、たとえば、日本に生まれた日系（？）日本人のような例はどうなるのか。日本語使用者の場合、そうした事例が大多数であり、かつそれこそが一般には標準だとされている。とすれば

「母語」＝「私の単一言語使用」を基準とすることは疑いえないのではないか。

しかし母語と母国語との重なり、そうした一致こそが幻想ではないだろうか。デリダのケースが明らかにしているのは、もともとどんな母語も、母国語とは異なるということではないだろうか。明確になっているのは次のような問題、つまり、現実とは異なるにもかかわらず、むしろそうした一致を望ましいとみなし、たえずその一致をつくりだそうとする理想化、もっと言えば、そのような国家のイデオロギーではないだろうか。

デリダはアルジェリアのユダヤ人にとって、フランス語とその他の言語（アラビア語、ベルベル語、ヘブライ語等）が切り離された二つの禁止について語っている。ひとつは、学校教育による禁止。フランス語学習が第一言語に固定されたことで、アラビア語の履修は選択外国語に追いやられ、事実上ほとんど誰も学ばないような環境ができていた。

もうひとつは、フランス本土への送り返し。当時アルジェリアでフランス語を学ぶということは、アルジェリアでのフランス語（当然方言や訛りがある）を二次的な付属

物とみなし（ここには禁止や貶下があつた）、フランス本土への幻想を醸成することにはほかならなかつた。フランスの本場はメトロポリス（都市）、パリという首都にあるべきだという幻想。そして実際、アルジェリアと本土が区別されているからこそ、そのような幻想が生まれるのである。デリダは、フランスとは「亡霊性そのもの」（九七頁）だつたのではないかと自問している。

興味深いのは、デリダはそのことで、フランス語にたいして「打ち明けることもはばかられる手に負えない不寛容さ」を身につけてしまったと告白している点である。本人も喚起するように、デリダのいう脱構築の標的はまづもって「純粹さ」の幻想なのだが、ことフランス語については、デリダはあたかも純粹主義者のようであり、「許容したり称讚したりするのは、ただ純粹なフランス語だけなのだ」（一〇六頁）と打ち明けている。いささか戯画的にはあるが、それは「まるで自分がフランス語の最後の擁護者にして顕揚者であるかのようにだ」（一〇七頁）とさえデリダは述べている。

（自分の話で恐縮だが、たとえば、筆者は一人の「日系日本人」である。高校まで兵庫県丹波市という田舎で育っており、当然の

ことながら関西弁で話していた。それが私にとっての「母語」ということになる。さまざまな偶然が重なり、東北大学に進学して仙台で四年間過ごして以来、東京、イギリス、新潟に移り住んできた。結果、一切関西弁は使わなくなった。その理由は、まず仙台で関西弁が受け入れられているように自分には思えなかったからだ。とりわけ大学という場で学問をするさいには、関西弁を話すことは不適切と感じられた。いま思えば、ほとんど一方的な偏見にすぎないが、関西弁のイントネーションがもつ押しつけがましき、「お笑い」指向の通俗性は、当時の自分にとって、学問言語の「純粋さ」にとつての夾雑物でしかないと感じられたのだった。

デリダにとってフランス語は、恣意的に自分が操作しうるものではなく、まさに他者の言語として文法や語法を厳しく課してくるものであり、尊重しなければならぬい当のものである。言語の純粋さへの過剰な嗜好、いわば「フランス語よりもフランス語的であること」を指向するデリダの執着——「強迫的要請」(二〇六頁)とデリダは述べている——は、いっけんデリダ自身のいう脱構築、すなわち「純粋さの脱構築」に真っ向から衝突しているようにみえる。

しかしこれは、そもそも脱構築が、言語の法の純粋さ

をただ汚すことにあるのではないということを示している。脱構築はたしかに純粹幻想を標的としているが、それはただ汚れや不純さを持ち込むことで払拭できるわけではない。そうした異物や不純物の称揚は、かえってさらなる純粹幻想を裏面から強化することに帰着するからだ。この点にデリダはきわめて自覚的である。脱構築は、むしろ言語の法を厳格かつ過激にたどり直すことを通じて、言語の純粋さの向こう側、正則や正語法の彼方に宿している言語そのものの「狂気」を垣間見ることのうちに存するのである。その「狂気」については後ほど説明したい。

母語幻想と母語の狂気

話を元に戻そう。アルジェリアのユダヤ人だったデリダは、フランス市民権をもち、フランス語を「母語」かつ「母国語」としたことで、むしろアラビア語やベルベル語からも、ヘブライ語からも、ひいては(本土を標準とした)フランス語そのものからも切り離されてしまった。デリダの母語は、実のところ母語ではなく、それ自

体が学校で学び直さなければならない他者の言語であり、「本質的な疎外」（二三頁）のうちでしか「私の母語」ではないようなそうした言語にはかならない。

くり返すが、こうした疎外は、たんにデリダの個人史に尽きるものではなく、言語と文化全体にとっての普遍的な現象として受け止めなければならない。私たちの社会では、どんな母語も学校で母国語として学び直さなければならぬからであり、それ自体は自然な言語でもなく、国家の本質的な部分をなす言語政策の産物なのである。母語は母国語化される。

ここで肝要なのは「はじめに母語があった」という起源としての認識が、学校教育を通じて遡行的にのみ見いだされているということである。自然に根ざした母語が起源に存在した、それが規範化、平準化、画一化を通じて各国語へと歪められた、というのではない。むしろ規範化された言語を基準としてこそ、自分の特有言語だった「母語」の存在がはじめて発見されるのである。実際には、母語という起源幻想があとから培われる。要するに、起源としての母語は存在しないのだ。母語幻想への抵抗——これが、デリダの単一言語使用論、ひいては

脱構築そのものの核心にある。

では、はじめには何があるのか。一言でいえば、他者の痕跡であり、それこそが「他者の単一言語使用」である。先に掲げたテーゼ「私はひとつしか言語をもっていない、ところがそれは私のものではない」を思い出そう。たしかに「はじめに」私は最初にひとつの言語を使用していた。それは言語といってもひとつしかない言語、ひとつの特有言語であり、まだ規範化以前、共有化される以前の不分明な言語、本来は「ひとつ」と数えることすらできないような「言語」であるだろう。あとからそれは「母語」と呼ばれるだろうが、遡行的にしか発見されえないかぎり、すでに起源の言語ではないだろう。

デリダが「私の単一言語使用」に代えて「他者の単一言語使用」と言うのは、私を用いているこの言語がただ他者（両親、家族、周囲の者）に由来しているということだけではない。また、母語が母国語へと組み込まれるプロセスのなかでつねに国家という他者が私の特有言語を篡奪し、学校を通じて規範化するからというだけでもない。いわば母語以前の「私の」特有言語は、そもそも私が成立する以前の言語、私には操作しえない言語だったから

であり、誰ともつかないような「他者」によって呼びかけられ、そして呼びかけることで生じた、そうした言語以前の「言語」なのである。ここではきわめて繊細な事柄が問われている。デリダの言葉に耳を傾けてみよう。

彼〔単一言語使用者〕は絶対的な翻訳のなかに、準抛の極なき、起源の言語なき、出発の言語なき翻訳の渦中に投げ出されているのである。彼にとって存在するのはただ、こう言つてよければ、着来の諸言語だけ、だがそれも、いったいどこからみずからが発してきたのか、いったい何から出発して、みずからが話しているのか、そしてみずからの行程の方向がいったいどのようなものなのか、それらの言語にはもはやわからなくなっている以上、みずからのもとに着来することには成功しない——特異な冒険だ——そんな諸言語だけなのだ。(一三六頁)

そのような、名もなき他者からの「最初の」言語、「最初以前の」言語のうちに、デリダは「狂気」の可能性を読み取っている。『他者の単一言語使用』のある長

い註のなかで、デリダは、ハンナ・アーレントの有名な対談「何が残ったか？ 母語が残った」に応答して反論している。

アーレントがナチスのユダヤ人迫害から逃れ、アメリカ命を生き延び、みずからの著書や言論活動や教育活動で英語使用を強いられたその苦難の道を経て、最後に残ったものとして指し示すもの、それが「母語」なのだ——「狂ってしまったのは〔ナチス支配下のドイツ人であり〕、ドイツ語ではありません〔…〕何ものも母語に代わることはできないのです」。

このアーレントの発言にたいして、しかしデリダが反問するのは、絶対的な基盤となるべき母語そのものが「狂つて」しまうことではないのか、少なくともその可能性はないのか、ということである。「ひとつの言語はそれ自体で狂気と化すこと、それどころか、ひとつの狂気、狂気そのもの、狂気の場合、法における狂気と化すことがありうるということ」(一八二頁)、この可能性を考慮しなければならぬのだ。あたかもデカルトの明晰判明なコギトが、すべてを疑わしくしてしまう「悪霊」の欺瞞と表裏一体でありうるのではないかとミシェル・フーコー

に疑問をなげかけた、かつてのデリダがここにはいるかのようである（「コギトと狂気の歴史」参照）。母は、狂女でありうるということ。ここでは実際に狂っているかどうかというより可能性だけが問われているのだが——しかしどうやって「母語の狂気」を確認できるのだろうか？——、狂気のそうした可能性が残り続けるかぎり、母語の取り換えのきかない唯一無二の確実性、その特権性は、根本から嫌疑をかけられざるをえなくなる。

アーレントは「母語の抑圧」の帰結として「アウシュヴィッツ」に言及している。デリダに言わせれば、たんにドイツ人たちの狂気が問題ではなく、この出来事は、主観に統御された自己意識の言語（理性の言語）にはもはや属さないような論理として、まさに「母語」（ドイツ語）そのものの狂気として考察を強いるものにほかならない。デリダは「アウシュヴィッツ」にたいしては間接的な仕方ではあるが、この出来事と対決した偉大な作家として、カフカとツェラン、ドイツ語で書いたこの二人の非ドイツ人を名指している。「彼らがドイツ語に何を生じさせたかをただ名指すためにすら、ひとつの註では足りないだろう」（一九一頁）。

結びに代えて——言語の使用、言語の約束

母語は幻想であり、母語にみずからの同一性を見いだすことができないとすれば、私は、何を基盤にすればよいのだろうか。しかしそのような基盤を私はそもそも必要としているのだろうか。私という同一性が成り立つ基盤がなくなったとして、それは何を意味しているのだろうか。そのような基盤なしに、言語が使えなくなるわけではないだろう。けっして私の言語そのものが消え失せてしまうわけではないだろう。母語という幻想なしに、共同体であれ、生まれであれ、故郷であれ、伝統であれ、他のなんであれ、母語がつくり出すいかなるアリバイもなしに、いかなる最終的な同一性もなしに、それでも言語を用いているという事実が先行しているのではないだろうか。

「私はひとつしか言語をもっていない、ところがそれは私のものではない」——他者の単一言語使用のこのテーゼは、「私の」言語がとりもなおさず「他者の」言語であるということ、それは可能性として、私の意図も

あなたの意図も関係なく、私の言語がすでにしてあなたの言語に、あなたの言語がすでにして私の言語に応答しはじめていたということの意味するだろう。デリダの言い回しを用いれば、これはあれやこれやのあらゆる言語に先立って「ひとつの言語が約束されている」ということにほかならない。「私が口を開くたびに、私が話し、あるいは書くたびに、私は約束しているのだ。望むと望まざるとにかかわらず」(一四九頁)。

というのも、そこに言葉が見いだされるたびに私は、他者に応答する可能性を獲得するからである。どんな他者かはわからない。今後わかる保証もない。にもかかわらず、はじめに他者の痕跡として言語は約束している。約束することで私たちを未来に開いたままにしておくのである。

たしかに母語幻想の喪失は、私の同一性を危機にさらすのかもしれない。しかし他方、たんにユダヤ人共同体のみならず、共同体そのものへのデリダの不信感、母語に基づかない共同体、同一性に依存しない共同体、というよりもはや共同体という言葉を用いる必要がない他者と私の応答可能性、私たちの応答可能性に裏打ちされ

ている。デリダの他者の単一言語使用論は、そのような応答可能性の約束を最大限未来に開いたままにしておくとする「より一般的な倫理」(前出)を指し示すものだ。その思考は、自明視されながら実のところ存在しない「母語」によって共同体を閉じるのではなく、むしろそうした母語の不在に、誰のものでもない言語が私たちに約束する開かれを残しているということこそ、私たちの希望を見いだすのである。

引用文献*1

ジャック・デリダ『言葉について——哲学的スナップショット』林好雄・森本和夫・本間邦雄訳、ちくま学芸文庫、二〇〇一年

——『たった一つの、私のものではない言葉——他者の単一言語使用』守中高明訳、岩波書店、二〇〇一年／『他者の単一言語使用——あるいは起源の補綴』同訳、岩波文庫、二〇二四年*2

——『コギトと狂気の歴史』エクリチュールと差異(改訳版)』谷口博史訳、法政大学出版局、二〇二二年所収

ジャック・デリダ、エリザベート・ルディネスコ『来たるべき世界のために』藤本一勇・金澤忠信訳、岩波書店、二〇〇三年

注

* 1 引用した訳文は、既訳を参照させていただいたが、本文との兼ね合いで筆者がわずかに変更した箇所があることをお断りする。

* 2 本稿での参照頁は、岩波文庫版で指示した。刊行前の文庫版の参照を許可してくださった、訳者の守中高明氏、岩波書店の吉川哲士氏のご高配に感謝します。

宮崎 裕助(みやざき ゆうすけ)

一九七四年生まれ。兵庫県出身。東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了。博士(学術)。新潟大学人文学部准教授を経て、現在、専修大学文学部教授。専攻は、哲学・ヨーロッパ思想。著書に『読むことのエチカ——ジャック・デリダとポール・ド・マン』(青土社、二〇二四年)、『ジャック・デリダ——死後の生を与える』(岩波書店、二〇二〇年、第一二回表象文化論学会賞受賞)、『判断と崇高——カント美学のポリテイクス』(知泉書館、二〇〇九年)ほか。共訳書に、ジャック・デリダ『メモワール——ポール・ド・マンのために』(水声社、二〇二三年)、ロドルフ・ガシエ『脱構築の力——来日講演と論文』(月曜社、二〇二〇年)、ジャック・デリダ『哲学への権利2』(みすず書房、二〇一五年)、ポール・ド・マン『盲目と洞察——現代批評の修辭学における試論』(月曜社、二〇二二年)ほか。

15分で読む 母語の狂気から他者の単一言語使用へ
——ジャック・デリダの(非)フランス(現代)思想入門 ブックガイド

デリダの著作

出版社	ISBN(978)	書名	著者名	本体価格	刊行
岩波文庫	4003860229	他者の単一言語使用——あるいは起源の補綴	ジャック・デリダ著、守中高明訳	910	2024
ちくま学芸文庫	4480086136	言葉にのって——哲学的スナップショット	ジャック・デリダ著、林好雄・森本和夫・本間邦雄訳	品切れ	2001
岩波書店	4000225243	来たるべき世界のために	ジャック・デリダ、エリザベート・ルディネスコ著、藤本一勇・金澤忠信訳	品切れ	2003
駿河台出版社	4411003775	イスラームと西洋——ジャック・デリダとの出会い、対話	ムスタファ・シェリフ著、小幡谷友二訳	1700	2007
青土社	4791763924	言葉を撮る——デリダ/映画/自伝	ジャック・デリダ、サファー・ファティ著、港道隆・鶴飼哲・神山すみ江訳	2800	2008
ちくま学芸文庫	4480098368	歓待について——パリ講義の記録	ジャック・デリダ著、廣瀬浩司訳	1000	2018

その他の著作

出版社	ISBN (978)	書名	著者名	本体価格	刊行
白水社	4560098004	デリダ伝	ブノワ・ベーターズ著、原宏之・大森晋輔訳	10000	2014
Pヴァイン発行、日販アイ・ビー・エス発売	4910511689	ジャック・デリダ——その哲学と人生、出来事、ひよっとすると (ele-king Books)	ピーター・サモン著、伊藤潤一郎ほか訳	3400	2024
講談社学術文庫	4062922968	デリダ——脱構築と正義	高橋哲哉	1280	2015
みすず書房	4622078296	ジャッキー・デリダの墓	鶴飼哲	3700	2014
岩波書店	4000613859	ジャック・デリダ——死後の生を与える	宮崎裕助	3700	2020
みすず書房	4622070122	ハンナ・アーレント「『何が残った？ 母語が残った』——ギュンター・ガウスとの対話」『アーレント政治思想集成1——組織的な罪と普遍的な責任』	アーレント著、J. コーン編、齋藤純一・山田正行・矢野久美子訳	品切れ	2002
インスクリプト	4900997035	〈関係〉の詩学	エドゥアール・グリッサン著、管啓次郎訳	3700	2000
青土社	4791761340	マグレブ 複数文化のトポス——ハティビ評論集	アブデルケビール・ハティビ著、澤田直編訳、福田育弘訳	品切れ	2004
みすず書房	4622079682	地に呪われたる者 [新装版]	フランツ・ファノン著、鈴木道彦・浦野衣子訳	3800	2015
バブリブ	4908468223	ビエ・ノワール列伝——人物で知るフランス領北アフリカ引揚者たちの歴史(世界引揚者列伝1)	大嶋えり子	2300	2018
高文研	4874984413	植民地主義の暴力——「ことばの檻」から(徐京植評論集1)	徐京植	3000	2010
岩波現代文庫	4006002633	「国語」という思想——近代日本の言語認識	イ・ヨンスク	1880	2012
岩波現代文庫	4006022112	エクソフォニー——母語の外へ出る旅	多和田葉子	1060	2012
ちくま文庫	4480432667	増補 日本語が亡びるとき——英語の世紀の中で	水村美苗	880	2015

欧語文献

出版社	ISBN (978)	書名	著者名	本体価格	刊行
Seuil	2020982832	<i>Derrida</i>	Geoffrey Bennington et Jacques Derrida	24.08 €	2008
Cambridge University Press	1107674622	<i>The young Derrida and French philosophy, 1945-1968</i>	Edward Baring	34.99 US\$	2014
BOURGOIS	2267024234	<i>Les français d'Algérie: édition revue et augmentée</i>	Pierre Nora	品切れ	2012

独立書店小史

和氣 正幸（本屋ライター、BOOKSHOP LOVER）

独立書店の話をしよう。小規模ながら独自の光を放つ本屋の話を。

独立書店（あるいは独立系書店、わざわざ系本屋とも）と呼ばれる小さな本屋がにわか注目を集めて出してからどれくらいだろう。雑誌『BRUTUS』（マガジンハウス）が「本屋好き。」特集を組んだのが二〇一一年のこと。当時、独立書店とほぼ同じ意味で使われていた「個性派書店」の特集は雑誌『Hanko』の一九九六年一月七日版が初出だった。出版業界の売上がピークに達したのが一九九五年であることを考えると、出版業界が成長を終え、成熟期に至った際に何らかの特徴を備えた書店が人の口の端に上るようになってきたということだろう。

具体的な店を追っていこう。まず前史として一九八六年にヴィレッジ・ヴァンガードの一号店が名古屋に生まれる。「遊べる本屋」として雑貨と本をシームレスに並べ、目を引くPOPで話題となった。筆者が出会ったのは二〇〇〇年代後半ですでに全国展開された後だったがそれでも当時の筆者にとって「おもしろい本屋」と言えばヴィレッジ・ヴァンガードだった。一九九六年には往来堂書店が千駄木に開店。単純なジャンルではなく隣り合った本の内容を緩やかにつなげていくことで本棚をつくる手法を「文脈棚」とはじめて名付けた店だ。

二〇〇〇年代に入ると本屋好きなら誰もが知っているような店が生まれる。中目黒の COW BOOKS や表参道のユトレヒト、博多のブックスキューブリック、大阪のスタンダードブックストア心齋橋(二〇一九年閉店)。その後天王寺に移るが二〇二三年に閉店)、京都のガケ書房(二〇一五年閉店)や恵文社一乗寺店(セレクト書店の元祖として有名にした堀部篤史氏が二〇〇二年に書店部門マネージャーになっている。二〇一五年に退職)などである。また、二〇〇〇年には『ぼくはオンライン古本屋のおやじさん』(風塵社)でライターの北尾トロ氏が本のネット販売の可能性を示し、その翌年には佐野眞一氏『だれが「本」を殺すのか』(プレジデント社)が出版業界に対する危機感を顕にした。二〇〇五年には不忍ブックストリートの一箱古本市がはじめて開催され、本を売ることを通してコミュニケーションを皆が求めていることが周知された。いま現在、新刊入荷やイベントなどの宣伝で重要なツールとなっている Twitter(現在は X) や Facebook が二〇〇九年にサービスを開始したことも忘れてはならない。こうやって見てみると二〇〇〇年代は現在に続く独立書店や数々のブックイベントの種とも言える動きがあったのだと分かる。

二〇〇〇年代が種だとすると二〇一〇年代はその種を芽吹かせるための環境が整った時期だと言えるだろう。二〇一二年に「あたらしい街の本屋」を謳いオープンした本屋 B & B はビールを飲みながら本を選ぶことができ毎日イベントを開催した。「こんなやり方があるのか」と感心した関係諸氏も多いはずだ。二〇一三年にはその共同オーナー・内沼晋太郎氏が『本の逆襲』(朝日出版社)を出版し、「広義の本に関わる仕事、それをあらためて「本屋」と呼ぶとしたら」と書き、本と本屋の可能性を広げた。二〇一四年には「これからの本屋講座」をスタートし、本屋レマガンガなど多くの卒業生を生み出した。

そして、二〇一六年にオープンした本屋Titleは、元リプロで店長経験もある辻山良雄氏が開いた店でその選書や方法論を示した『本屋、はじめました 新刊書店Title開業の記録』（苦楽堂）は本屋を始めたいと考える人にとって重要な一冊となった。ノウハウはもちろんのこと、試算とはいえ事業計画書が収録されていたことが何より大きい。それまでは夢だった「本屋になる」が本書を読むことで一気に具体的な目標になったのだ。さらに、二〇一八年には内沼晋太郎氏が『これからの本屋読本』（NHK出版）を出版し、最後のブラックボックスだった独立書店にとっての「本の仕入れ」を具体的に教えてくれた。これにて、本屋になるための方法論が揃った。ここから独立書店の数が少しずつ増えていくことになる。

公式な数字がないため筆者が個人的に追っている限りの独立書店の開店数を見ていくと二〇一五年と二〇一六年が六店だったが、『本屋、はじめました 新刊書店Title開業の記録』が出版された二〇一七年に一七店と桁が増え、その後、『これからの本屋読本』が出版された二〇一八年が一五店といったん下がるものの、二〇一九年は二五店、二〇二〇年が三五店、二〇二一年で七九店、二〇二二年で五六店、二〇二三年には一〇六店もの店が開店している。右肩上がりなのである。二〇一〇年代に芽吹いた種が二〇二〇年代に花開いてきたことがこの数字から分かるだろう。

では二〇二〇年代はどうかというと、まだ四年しか経っていないが「実験」の二文字が当てはまると筆者は考える。というのもシェア型書店が登場したからだ。シェア型書店の新規性はビジネスモデルそのものを変えたところにある。「街に本屋がなくなる」と叫ばれてから久しいがその原因が構造にあると言われてからもこれまたかなりの時間が経った。簡単にまとめてしまえば

本屋の粗利率が低すぎるというものだ。ここでは簡単に示すが新刊の粗利は二〇%〜三〇%。本体価格一六〇〇円の本を一冊売って三二〇円〜四八〇円。そこから人件費や家賃、光熱費を支払うこととなる。本屋は薄利多売の商売なのだ。シェア型書店はそれに対して棚を月額制で貸すことで成り立つため本の粗利率云々という議論には与しない。「貸した棚の品揃えや補充をオーナーがコントロールできないこと」「書店員としてのスキルと棚を借りてくれた人Ⅱ箱店主たちのコミュニティを運営するスキルが違うこと」などいくつか運営上の難点はあるが、本屋を商売として考えたときに固定収入があることは大きなメリットであるため、様々なバリエーションを含みながらもシェア型書店は広がってきた。

バリエーションというのは例えばシェア型のみで成り立つオンリー型と筆者が表す店（ブックマシジョンや渋谷〇〇書店、PASSAGE by ALL REVIEWS、ほんまるなど）や、独立書店の一部の棚を月額制で貸し出すハイブリッド型の店（本屋象の旅、小声書房、BOOKSHOP TRAVELLERなど）がある。現在はオンリー型が多いが、筆者としては独立書店として棚の独自性を保ちながら、運営の一部をシェアするハイブリッド型に光明があると考えている。というのも、収益面はもろんのことながら、店の運営に一部関わってくれる箱店主という存在は独立書店主の孤独を癒やすからだ。BOOKSHOP TRAVELLERを六年運営してきて思ったことなのだが、店の運営に困ったときに気軽に相談できる人間が近くにいることは殊の外重要なのである。ひとりで思い悩んでいると「なんでこんなことをやっているのか」と思い詰めてしまうことも多い。実際、海外の話ではあるがお隣の国・韓国では開店から数年で店をやめてしまう例も多いと聞く（ハン・ミファ氏『韓国の「街の本屋」の生存探究』クオン、二〇二二年、七八―八三頁）。先に挙げたように独立書店が増え始



著者近影

めてから五年以上経つ。なかにはすでに閉店してしまった店舗もあるが、もし彼ら彼女らに頼る先がもっとあったのなら結果は違ったのではないだろうか。

きっとこれからも独立書店は増え続けるだろう。内沼晋太郎氏が『これからの本屋読本』で「本屋は、何とでも掛け算ができる」と書いたように、カフェやギャラリー、雑貨のほかにも様々な業態と掛け合わせた本屋がこれからも生まれるに違いない。さらにシェア型書店であればそこを借りる人次第でどのようなものでも置かれる可能性があるわけで、それはつまり、オーナー一人だけではなく、棚を借りた箱店主全員が本屋の活用の可能性を考えてくれるということでもある。考えれば考えるほど本屋の可能性は無限大であり、いかに開拓されていくかをこれからも見て、聞いて、考えていきたい筆者なのである。

和氣 正幸（わか まさゆき）

これからの図書館に必要なこと

1 これからの図書館の本質と役割

図書館は、情報資料を収集・保管し、利用者への提供等を行う施設・機関なのですが、昨今の情報資料の在り方や提供の仕方が変わりつつあります。近年、新聞・ラジオ・テレビ等から情報を収集していたものが、インターネットの普及とテクノロジーの進歩により、図書館にも大きな影響を与え、変わってきています。

本がまだ貴重だったころ、図書館は館内閲覧のみで、本が鎖に繋がれている時代もありました。その図書館ですら、紙の出現以前には別の情報資源があり、図書館とそもそも常に変化し続けてきたわけです。それから私

丸濱 晃一（ミライ工長岡互尊文庫 TRC 統括責任者）

たちがよく知る図書館へと形づくられていくわけですが、現代ではその本質と役割が更に変化しようとしています。かつての図書館は図書を提供する場所であり、本そのものが主要な情報資源でした。しかし、情報化が進展するにつれて、図書館は本以外の情報を提供する場所としての側面も強調されており、役割とニーズは多様化し、様々なサービスを展開しなくてはならなくなっています。更に、図書館は単なる情報提供の場所にとどまらず、コミュニティスペースとしての役割も重要視されるようになっていきます。ワークショップ、講座、講演会、読書会、おはなし会、展示会、上映会、音楽会など多岐にわたるイベントを開催し、地域の人々が集い交流できる場を提供することで、コミュニティ全体の活性化に貢献



独自のテーマごとに分類された棚

しています。このような「場」としての図書館の役割は、デジタル化が進んだ現在でも重要性を増しています。

その変化を象徴するような例として、ミライエ長岡互尊文庫（以下、「当館」）のような「本の貸し出しを主としない図書館」を挙げることができます。そして、そのような図書館は今、増え続けようとしているのです。

2 棚で訴える

当館について少しお話しすると、図書館窓口業務は株式会社図書館流通センター（以下、「TRC」）が運営し、ブックディレクター 幅允孝さんが代表を務める有有限会社 BACH（以下、「BACH」と選書、棚づくりを行い、TRC & BACH meet Nagasaki として民間が業務委託を受け運営している図書館です。アウトリーチサービスは行わず、「街の賑わい創出」に主軸置き、「場」としての図書館に特化しています。

「ひらめく」「くらす」「はたらく」をエリアテーマに、15の大テーマ、約170の中テーマ、1000を超える小テーマで棚が構成されています。通常の図書館が



常にメンテナンスを行っている書架

NDC（日本十進分類法）で配架されているのに対し、館内4万冊すべてがこの独自の分類により構成され、通常の図書館で最も多く所蔵されている小説等はあまりなく、テーマに合えばコミックや洋書も積極的に購入しています。そして、1枱の棚に1〜3冊程の本を面陳列し、直感的に本と出合える環境を作り出しています。

所蔵は4万冊と決して多くはなく、受け入れた本は半年間貸し出しを行わず、駐車場は一定時間を過ぎると有料、開架はNDCでの配列ではなく独自の分類で構成され、通常の図書館に慣れていると使いにくいと感じる点も多いはず。それなのに、日に平均1000人程も来館し（市内には当館以外に、中央館、地域館6館があります）、小説等の所蔵が少ないこともありますが、貸し出しはそれほど多くありません。ほとんどの来館者は本を借りることを目的とするのではなく、図書館で過ごし、それぞれの楽しみ方で読書をしていることは狙い通りですが、大変興味深いと思っています。

棚の鮮度を落とさないために、常に書架の面陳列の本の入れ替えメンテナンスを行い、整理、清掃を行っています。そのせいで、取材等を受けた際に一棚が触られて

「いないように感じますが」と、見た目を重視したことで敷居を上げているのではないかと言われることがありますが、それは、常に棚のメンテナンスを行っていることで書架が荒れていませんので、その誉め言葉ととらえています。朝は必ずすべての棚を開館前に整理し、書架のメンテナンスを行います。そのことで、どのテーマがよく触られているのか、また、あまり触られていない棚は、どのような作りこみが必要かなど、一日の始まりに確認を行っています。

「思いもよらない本との出会い」は、独自の分類から生まれるわけですが、そのためにはしっかりとしたコンセプトが大切になります。これがしっかりとしていないと、ただNDCを壊したに過ぎません。なぜそのようなカテゴリーにしたのか根拠が大切なのです。そのためには、その街が求めるコンセプトと本を幅広く網羅する必要があります、それは読み物を多く所蔵する図書館の次の課題と言えます。ただ、当館のような個人的な館が存在できるのは、50万冊近く所蔵する中央館の存在があることで成せていることは確かです。

当然、独自の分類は良いことばかりではありません。

目的を持った通常の図書館に慣れている皆さまにとって、目的の本がNDCで配架されていないことで探しにくいと感じることが多いかと思います。私も当初、通常の図書館に慣れていることから、配架に苦労をしました。ただ、具体的な目的がなくふらりと図書館に立ち寄り、本を眺めながら過ごす方にとっては、きつちりと分類されている図書館よりも、座った席の近くの棚に語り掛けてくる小テーマの文言があり、その中に必ず自分の興味がありそうな本がある独自の分類は、とても有効的だと思います。

受け入れ後半年間は本の貸し出しを行わず、半年後もキープックス(その棚になくはならない本)は貸し出しを行いません。それは棚の鮮度を落とさないためなのですが、貴重資料は「襟帯」として貸出を行わない図書館が多いなかで、当館ではあくまで、テーマに対しての必要性でキープックスを選定しています。

4万冊を4つのチームに分かれて管理し、毎週選書を行っています。それと並行し小テーマの見直し(分類・タイトル)を行い、次に選書する本をイメージして棚構成を行っているわけですが、常に棚の鮮度を落とさず維持



開放的な館内

することは、十分な人員と専門的な知識、経験を持った TRC と BACH が連携することで実現できていると思います。

3 ミライ工長岡互尊文庫の空間

所蔵4万冊に対し面積2500㎡、通常これくらい
の面積だと10万冊程度は所蔵できるかと思うのですが、
棚を低くし、十分な席数を確保するための開放的で贅沢
な空間となっています。また、「街のリビング」として
も上手く機能していると言えます。

デザイナーによる空間デザインはもちろんですが、掲
示物はほとんどなく、書体などのデザインも統一し、本
の並べ方に至ってもすべてルールを作っています。スッ
キリとした館内は非日常的とも言えますが、飲食OK、
おしゃべりOK、写真撮影OKと禁止事項が少ないこ
とで会話も弾むので、ちょうど「非日常と日常の間」の
ような空間になっています。加えて、地元で人気の飲食
店が運営するカフェもあり、週末は特に幅広い年齢層の
市民で賑わいます。

図書館にありがちな禁止事項が少ないことで、若い世代や子育て世代も過ごしやすく、新規利用登録数の多いことから、今まで図書館に来ていなかった層が多く利用していることもうかがえます。

一般、児童といったカテゴリーでは、当然本を分けていません。テーマの中に、絵本もあればコミックもあり専門書もあります。無意識に、子どもたちも大人の本に触れていますし、大人も児童書や絵本を手に取りやすい「自由な読書」の環境がここにはあります。それにより、大人も子どもも館内すべてを歩き来していますので、空間すべてが自由な雰囲気で包まれています。

照明は暖色系で夜も落ち着いた雰囲気です。昼光色の図書館と比べると暗く感じる方もいらっしゃいますが、ルクスは足りています。

当初、当館を訪れる皆さんの口々から出てくる言葉は「図書館じゃないみたい」でした。それは良い意味で狙い通りと言えます。特に県外からいらっしやった利用者からは「うちの街にも、こんな図書館があれば毎日通いたい」と最高の褒め言葉を頂き大変励みになりました。

4 図書館を運営するということ

ほとんどの皆さんが、図書館は市町村が直営で運営していると思うのが普通かと思います。しかし、ここ10数年前から民間やNPO等、行政ではない組織が運営する図書館が増えてきています。

そのような時代の変化から、当初、民間が公共図書館を運営することは困難とされましたが、多様化するニーズに適合することを得意とした図書館の分野に精通した民間や、地元のことをよく知るNPOなどの持ち味が時代の変化に合ったこともまた事実です。そして、この状況はまだ当分続きそうです。

そのような変化の中、当館も民間が運営する良さを最大限に発揮できている図書館のひとつだと言えます。

目的は運営するのがどこであるのかではなく、「市民の知る権利と表現の自由」を守るために、何ができるのかを追求し続けることに限るかと思います。利用者のニーズに合わせた情報提供を行うだけでなく、ニーズを生み出す新しい視点を示すために、単に図書を管理運営

するだけでなく、更に何ができるのかを追求できる者が運営を担っていくことが、その街の住民にとっては大切なことだと思えます。

5 紙の新たな価値

このような図書館の分岐点は、紙の本とデジタル情報の両方を活用し、利用者にとって最適な情報提供と場の提供を行うことを意味します。

最新の情報はデジタルの方が提供速度、修正が早いのに対し、本は様々な人の目が入り時間をかけて発行されることから信用度が高いとそれぞれ一長一短があります。当館では最新の情報をいち早く届けるための手段としてデータベースも多く準備され、特にビジネスパーソンに役立つ内容が充実しています。

本の展示については、BACHのディレクションにより、美術品のように視覚的・空間的に紙の本の存在を最大限に活かした展示を行っています。紙の本にはデジタルにはない感覚的な魅力とやすらぎ、目への優しさ、コレクションとしての魅力、情報保存の信頼性、そして

デジタルデトックスの時間があることが挙げられます。情報が溢れる現代社会の中で、本に囲まれる空間でゆくりと本と自分だけの時間に向き合うことは、とても豊かなことだと思えます。

また、本は単に情報取得の手段としてだけでなく、人間としての何か奥深いところに届ける装置として優れているのではないかと思わずにはおれません。これらの要素は、紙の本の存在意義を示し、デジタル化が進む中でも紙の本が持つ独自の魅力を強調しています。

一方で、デジタル化の波は次々と押し寄せてくることも想像できます。紙の本が美術品のように高額になるかどうかは別として、音楽で言うレコードの価値の見直しといった例もありますから、紙の本がなくなるということはないと思いますが、今後どのように変化し価値が見直されるかは分かりません。ただこれにより、図書館として紙の本を収集・保管・管理・提供していくことの重要性は増していくと考えます。

また、当館のような独自の分類を作ることは、現段階ではAIなどでは作っていくことが困難な領域だと、自分自身が体験して感じました。情報提供という形はテ

クノロジーの進化で随分と変わっていくかと思いますが、「場」としての図書館は人間でなくてはできない領域がまだ多く存在していると思います。

もしかすると紙の本を見るために、美術館のように入館料が必要になる時代も来るかもしれません。私設図書館や私的な図書室では、現在もその空間で過ごし、ここで選ばれた本を読むためにわざわざ入館料を払って過ごすわけですから、図書館で紙の本を読むことが特別なことになる時代が来るかもしれません。ただその時は、誰もがデジタルの資料やバーチャル図書館に無料でアクセスできる環境になっていると思います。

6 これからの図書館に必要なこと

AI時代に突入し技術が更に進化する現在、その中で図書館の未来はどうなっていくのでしょうか。ある時は情報リテラシーの教育の場として、そしてある時はデジタルデトックスのための癒しの場として、新たな役割を担うことが予想されます。また、AIにより医療や教育、働き方や労働者管理などは特に大きく変化してい

くことが予想されます。インターネット以降の図書館が変化したように、AI以降の図書館もまた持続可能な社会の実現に向けて貢献することが重要になってくるかと思えます。

そうなると、デジタル化とオンラインソースの充実が不可欠になってきます。電子書籍やオンラインジャーナル、データベースなどの提供を強化し、利用者が自宅やモバイルデバイスからも情報にアクセスできる環境を整備することがより強く求められることが予想されます。また、バーチャルリアリティやAIを活用した新しい学習体験や情報アクセスの手段も提供されることで、図書館の役割が更に拡大されていくのではないかと考えるのです。

技術の進歩により様々な障害の垣根は下がり、働き方（障害や病気の理由があっても、図書館の仕事ができる環境）・読書のバリアフリー化（居住地、年齢、身体的理由による障害があっても読書できる環境）が更に進むことで、図書館という場が今以上に使いやすく、そしてすべての方にサービスが行き渡ることが望まずにはおられませんし、そうあるように今できることを尽くしていきたいと思えます。

以上のように、これからの図書館は紙の本とデジタル情報の融合やサービスの拡充、行政と民間との連携、更にはAIによる様々な側面が進化を遂げることが考えられます。図書館は単なる情報提供の場を超えて、更なる知識や文化の共有、学習の促進、コミュニティの形成など、社会全体に深く関わる存在となっていくことが予想されます。

そのためには、以下の点に注力する必要があります。

- ・デジタル化と紙の本の共存…紙の本の魅力やデジタル情報の利便性を活かし、両者のバランスを保ちながら情報提供を行うことが重要になってきます。利用者のニーズに応じて適切なメディアを提供することが更に求められます。

- ・コミュニティとの連携強化…地域社会や産業界と連携し、ニーズに合ったサービスやプログラムを展開することで、図書館の存在感を高めなくてはなりません。地域の文化や歴史を活かした取り組みや、起業家や研究者とのコラボレーションも重要になってきます。

- ・情報リテラシー教育の強化…AI時代においては、

情報を適切に評価し活用する能力がますます重要となります。図書館は情報リテラシー教育を通じて、利用者の情報スキル向上を支援することが求められるようになってきます。

- ・持続可能な運営体制の構築…財政的な持続性や効率的な運営を図るために、民間やNPOとのパートナーシップや創意工夫が更に必要になってくるでしょう。環境への配慮やアクセシビリティの向上も更に重要な課題となってきます。

これらの取り組みを通じて、図書館は社会における重要な知的拠点としての役割を果たし、持続可能な発展を遂げていかななくてはなりません。図書館自らが、図書館の概念を壊していかなくてはならないということは、図書館員がもっと独創的で自発的になる必要があるのです。そうしなければ、ニーズに応えるだけで、ニーズを作り出すことができない。それは常に、後追いのサービスになってしまいます。

当館においても、現在は取り組みが新しいと言われることが多いですが、この先今やっていることが常識とな

り、次にどのようなように展開していく必要があるのかを、今のうちから考え意識し準備しておく必要があります。

7 これまでとこれから

私自身のことを少しお話しすると、現在はミライエ長岡互尊文庫のTRC統括責任者ですが、今までは図書館や歴史資料館、文化ホールの館長として館を運営してきました。この10年で5館の図書館を運営してきましたが、内2館の新館立ち上げという貴重な経験をさせて頂いています。エリアで言えば、九州・中四国・北陸甲信越になります。常々、図書館の概念を壊したいと思いつい運営に携わっていますが、これからも変わらず試みを続けたいと思います。

わざわざ行きたくなる仕掛けづくりを意識しているのですが、図書館での取り組みとしては、オリジナルグッズを制作し販売しました。図書館が物を売ることにまだまだ抵抗がある時代ですが、ちゃんとしたコンセプトと必要性を市に理解して頂き実現しました。思いのほか利用者の皆さんは、図書館が物を販売することに抵抗がな

かったことは個人的にも驚きでしたが、美術館等ではグッズの販売はあるので、そうやって考えると当たり前なのかもしれません。

現在では割と増えてきていますがボードゲームの収集を行い、毎月ボードゲームの日を設け世代間交流を視野にイベントに取り組んでいました。続けていると参加者は増え、そこでコミュニティが生まれていく様は大変興味深かったです。図書館としてボードゲームの所蔵登録のための情報作成を今後どのようにやっていくかという内部的課題も、やってみたら分かったことです。

図書館の敷地で夜にマルシェを開催し、地元酒造メーカーに協力を頂きお酒の販売も行ったこともありましたが、これは教育長の理解があったからこそ実現しましたが、このように年に一度くらい図書館でお祭り騒ぎがあっても良いと思います。また、地元有志によるイベントの会場として図書館の敷地を使ってもらうことで、「場」としての図書館の利用価値を考えました。その延長上でコ罗纳の只中、イベントを開催できなかったことを逆手に、「場」としての図書館の新たな活用が何かできないかを再構築し、普段の使われ方ではない図書館の「場」とし

てのプロモーション映像を制作し配信しました。配信することで、ここに来ることができなくても皆で同じように体験できることは、その後の新館PRのための動画制作等に役立ちました。

歴史民俗資料館では、昔の遊びという行事を毎年行っていました。スタッフが話している時に、初期のテレビゲームはもうビンテージでは？となり、イベントにしたところ大盛況でした。親が子に、子が祖父母に教え合う姿は、まさに現代の世代間交流でした。ヨーロッパでは、図書館がメディアとしてテレビゲームを收藏することは常識化してきています。また、子ども用の郷土資料を、史談会の皆さんの協力を頂きながら図書館が発行し販売したり、戦争体験者に語り部になって頂き講話を映像で記録し図書館で收藏したり、歴史民俗資料館と図書館を兼務したことで容易に連携できたことも貴重な経験となりました。

他には、プロのミュージシャンにお願いし、オリジナルの館内BGM制作を市民参加型で行ったり、売れっ子の画家にお願いし、利用者カードや読書記録帳のための絵を描いて頂いたり、この街に住んでいて良かったと

思っ頂ける取り組みも積極的に行ってきました。

このように、今まで普段図書館に来ない層へのアピールを続けてきたわけですが、今当館を運営していて感じるのは、禁止事項を減らすだけでこんなにも多くの皆様が来館するということです。今までの図書館は、使いづらかったのかもしれない。押し付けるのではなく寄り添うように、これからは読書も館内環境も自由にすることで、使いやすくなると感じています。

8 そして最後に

図書館は常に時代と共に変化し、新たな価値や役割を見出していくことが求められてきました。利用者のニーズや社会の変化に柔軟に対応しながら更なるニーズを生み出し、知識や文化の普及と共に、共有の場としての役割を果たし続けることが図書館の使命だと思えます。

どのような形になったとしても、図書館に終わりはないのですから。これからも「成長する有機体としての図書館」であり続けるために、何かひとつでも皆さまのお役に立てるならば幸いです。

未知の沃野を掘りおこす——へアジア文芸ライブラリー——のいままでとこれから

荒木 駿（春秋社編集部）

今から百年ほど前に起きたある出版社の分裂騒動から話を始めよう。

一九一八（大正七）年、四人の出版人と作家らによって春秋社は創業した。ほどなくしてそのうち二人が社を去り、神田豊穂と植村宗一（直木三十五の筆名で有名）の二頭体制になった。それが悲劇の始まりで、この二人はあまりに反りが合わなかった。神田は苦学の末に中学を出た実直なタイプだが、植村は芸者遊びで放蕩三昧。集金業務で関西を訪れた折、芸者を呼んでドンチャン騒ぎをして、遂に神田の堪忍袋の緒が切れた。

二人は大喧嘩の末、口も利かなくなつた。その後、豊穂は「直木には金を貸さない」と断言。そこで、

直木は冬夏社を興すことになる。一つの事務所に二つの出版社が存在するという異常な事態となり、春秋社の社員は右側の入口を使い、冬夏社の社員は左側の入口を使用するといった変則状態が続く。

（『春秋社』小史1『春秋』二〇二二年四月号）

のちに日本を代表する文字賞にその名を冠することになる作家が、遊蕩と逆ギレで「春秋社」から分裂して「冬夏社」を同じ事務所内に設立した、というのは笑話のようだが実話である（冬夏社は間もなく倒産した）。

現在では仏教書や音楽書の出版社として（それなりに知られている春秋社であるが、実は創業して最初に刊行した書籍は、植村⇨直木の発案による日本で最初の『ト

ルストイ全集』だった。それから百年を超える歴史のなかで（冬夏社や松柏館書店名義での出版も含めると）、『ドストエフスキー全集』、『高村光太郎選集』、中里介山『大菩薩峠』、夢野久作『ドグラ・マグラ』など、数々の名作文学を世に送り出してきた。現在では一部の古書蒐集家を除けば、そのことはあまり知られていない。



創業百六年目を迎える二〇二四年、アジアに特化した海外文学の新シリーズ〈アジア文芸ライブラリー〉の立ち上げを発表すると、多くの方から「あの春秋社が!」と驚かれた。「あの春秋社」がどの春秋社なのかは分かりかねるが、長い歴史に鑑みれば、それほど意外なことではない——とシリーズの企画を提案し、ほとんどの作品の編集を担当する編集者（つまりわたし）は思っている。

なぜ「アジア」で「文学」なのか。表向きの理由は本シリーズのリーフレットや巻末に収められている「刊行の辞」に譲ろう。この企画を思い立ったのは、かつてアジアの国々を巡った旅人として、海外文学が欧米偏重で

あることに予てより疑問を持っていたからである。より直截に言えば、なんでこの小説、読みたいのにいつまで経っても邦訳が出ないんだよ、と不満を持っていたのである。それがインド出身の作家・政治活動家であり『小さきものたちの神』でブッカー賞を受賞したアルンダティ・ロイの二十年ぶりの小説『至上の幸福をつかさどる家(仮)』(*The Ministry of Utmost Happiness*, 二〇二五年初頭刊行予定)である。

余所の版元が出さないならうちで出しちゃえば良いじゃん、というノリで始めたシリーズであるが、作品の選定にはいくつかの重要な基準がある。第一に担当編集者や翻訳者が熱意をもって読者に紹介できる作品であること。世間での評価のような客観的な基準はとりあえず置いといて、まずは作品への愛が大事。

一般に海外文学の企画を審議する際は、本国での売上や知名度、受賞歴、類書の売上、翻訳家の知名度などが考慮される。そのために企画を通しややすい売れそうな（だからといって売れるとも限らないのだが）企画ばかりを集めても、どこがやっても同じようなラインナップになってしまいうし、大御所の作家や有名な作品ばかりになって

アジア文芸ライブラリー
シリーズ刊行開始!

花と夢

故郷を離れラサの夜の街で働く4人の女性たちの切ない運命を慈愛に満ちた筆致で綴るチベット発シスターフッドの物語。



ツエリンヤンキ

星泉「訳」
2640円

南光

日本統治時代の台湾に生まれ、東京のモダンガールや、戦争と動乱で変わりゆく台湾を撮影しつづけた写真家の生涯。



朱和之

中村加代子「訳」
2860円

わたしたちが 起こした嵐

第二次大戦前後のマレーシアが舞台。世界20か国以上で出版決定、衝撃のデビュー作!



ヴァネッサ・チャン

品川亮「訳」
2970円

◆以後続刊／内容見本呈

春秋社 www.shunjusha.co.jp
東京都千代田区外神田2-18-6 (税込)
☎ 03-3255-9611 FAX 03-3253-1384

しまう。それって、なんかつまらない。数々の意欲的な作品を刊行してきた春秋社の名に恥じぬよう、主流とは言えなくとも紹介する価値のある作品を収録することとした。

次に、同時代の作品であること。「同時代」をどう定義するのは難しいけれど、同じ時代の空気を吸って、感じて、それを作品に反映させている作家の声を届けるシリーズにしたかった。

わたしは一九九〇年生まれであるが、同世代で海外文学を日常的に読んでいる友だちは少ない。わたしも彼らと同じようにサブスクで国内外のドラマやアニメを観たりゲームで遊んだりするが、それと併せて文芸書や人文書を読むととても面白い。しかし、周囲にはなかなかそ

の面白さに気づいてもらえないことが歯がゆかった。同じ時代に、こんなにも心血を注いで言葉を紡ぎ、それを訳している人がいる、そしてそれはとても面白い、というのに、それがまだ届いていないのであればそれは出版社の側に努力が足りないからであろう。作品の選定にあたっては、普段あまり本を読まない同世代の友だちにも薦められることが隠れた基準になっている。そして後述するように、同時代の感性を重視した造本にした。

また、アジアに関係する文学作品ならなるべく垣根を設けずに収録することとし、なるべく「アジア(の)文学」という言い方も避けるようにした。たとえば「日本文学」というと「日本」で「日本人」が「日本語」で書いた作品であると理解されるように(実際のところ、それは



写真1 アジア文芸ライブラリーの3冊を並べたところ

非常に疑わしいが、「アジアの文学」というと、アジアの域内で、その地域の言語によって書かれた作品を想像するかもしれない。しかしたとえば国を離れて欧米に住み、移住先の言語や英語で執筆する作家も多いし、様々な事情で出身地にいられなくなった作家もいる。またアジア系二世や三世としてアジアを再帰的に見つめ直す立場から作品を発表する作家もいる。本シリーズではあえて境界を定めず、できるだけ幅広い作品を対象とすることで、様々な「アジア」の姿に触れるシリーズにした。

〈アジア文芸ライブラリー〉などと銘打って、アジアの文学を代表するようなシリーズだと思われるかもしれないが、そんなことはない。映画でいえば単館系、芝居でいえば小劇場演劇のような、片隅のプロジェクトのつもりである。



シリーズの装釘とロゴのデザインは佐野裕哉さんをお願いした。佐野さんは一九八七年生まれで、戸田ツトムさんの事務所に勤めたのち独立し、人文書や詩集を多く手掛けている。造本装幀コンクールで文部科学大臣賞を



アジア文芸ライブラリーのロゴ

受賞した経験を持つ、実力あるデザイナーだ。娯楽がデジタルコンテンツに取って代わられるなかで、紙の本を強みはその物質性にあると思い、本を所有することの喜びを実感できるような造本・装釘を目指した。

シリーズには統一したフォーマットを作ったが、それぞれの作品の個性が生きるように、カバーの前面(いわゆる表紙)のデザインは自由度を高くした。また、カバーの背の色を作品ごとに変えることにより、本棚に並べたときに見栄えがするように、そしてシリーズの全作品を揃えたいかなるような造りにしてある(写真1)。

ロゴは、東アジアの伝統的な吉祥模様である「宝相華^{ほうそうけ}」を意匠化した(左図)。様々な花のモチーフが組み合わせ、西方から伝わったとされる唐草模様と融合した宝相華は、文化の伝播と繁栄、そしてアジアの各地の繋がりを象徴している。唐代の墳墓の副葬品から正倉院宝物の琵琶、近代では東京国立博物館本館のモザイクタイルや着物の帯など、時代を超えて多くの美術工芸に描かれて

いるが、佐野さんはそれを花形活字を用いて表現することで、文学的な息吹を与えてくれた。

装画を誰に・何を描いてもらうかを検討することには毎回、佐野さんと長い時間を掛ける。たとえばシリーズ第一作『花と夢』は、チベットの夜の街で、様々な事情を抱えて生きる女性たちの人生を描いたシスターフッドの物語であるが、都会で孤独を抱えながら生きる女性にとって宝物のような一冊になってほしいと思っていた。装画はチベット語の原書に倣い、作品のテーマであり、主人公を象徴する花を用いたデザインにしようと思ったのだが、それにしても花というのは、あまりに安易に「女性」と結びつきやすい。そのようなジェンダー化された表象のようになることを避けることも重要で、どのようなタッチが良いか検討することに長い時間が掛かった。最終的には佐野さんが、荻原美里さんがかつてあるイベントのために描いた草花の絵を見つけてきてくれて、この感じでいきましょう、と決まった。荻原さんはラサの春を象徴する桃の花を、主人公である四人の女性に擬え、四輪の花で表現してくれた。可憐であると同時に、風が吹いても倒れない強さをも表している(写真



写真2 『花と夢』書影

2。

これまでに装画は荻原さんのほか、柳智之さん(『南光』)、丹野杏香さん(『わたしたちが起こした嵐』)に描き下ろしていただいた。いずれも現在アートシーンの第一線で活動し、今後ますますの活躍が期待される画家・イラストレーターの面々である。作品の世界に寄り添い、その魅力を伝える素敵な作品を描いていただいたが、美しい本を世に送り出すことは編集者として無上の喜びである。ひとえにデザイナーと画家の協働のお蔭であり、感謝の念が尽きない。

◆

今後は収録作品の幅をもっと広げていきたい。近隣の国々だけではなく、東南アジア、西アジア、中央アジアなどの作品を収録する予定である。ジャンルについても、いわゆる純文学やジャンルフィクションは当然のこと、詩や戯曲、評論なども収録したいと思っている(具体的な企画はいまのところないが)。

注目すべき作品は、インドネシアで初めてブックカバーの候補になった作家、エカ・クルニアワンの『美は傷(仮)』(Gantik In Lukar, 二〇二五年初頭刊行予定)だ。オランダ植民地時代の末期にジャワ島の港町で生まれた娼婦を主人公として、百年近い歴史に伝説や神話を織り交ぜながら奇想天外なストーリーが展開される本作には、原稿の最初の一文を読んで打ちのめされ、夢中になって最後まで読み進めた。『百年の孤独』の再来かと思うほどに面白く、この本と出会うために(アジア文芸ライブラリー)を始めたのではないかとさえ思った。これはなんとしてでも出さねばならないと、鼻息荒くして企画を通した。

二〇〇二年に出版された本作は、現在までに三十四の言語に翻訳出版されている。英語版は二〇一五年に刊行されたが、実はそれに先立つこと九年、日本でも翻訳刊行されていた。しかし自費出版のような形であったし、出版後まもなく版元は倒産してしまったためにほとんど日の目を見ることがなかった。このままお蔵入りさせてしまうのはあまりにもつたいない。

インドネシア語から日本語へ翻訳する翻訳家は少ないが、その割にインドネシアの作品はほとんど日本で読まれていない。聞けば出版社に企画を持ち込んでも、「インドネシア文学は売れない」と言われてしまうことが多いそうだ。豊穡な作品世界を「〇〇文学」のようなラベルで処理してしまうのはほとんど暴力に近いことだと思う。わたしは、過去にインドネシア文学で売れた作品がなかったからといって、「インドネシア文学は売れない」などと断じる勇氣はない。しかしながらおそらく、これまでにそうして見向きもされなかった作品や、発見されていない名作が、この世界にはたくさんある。それを掘り起こすことが〈ヘアジア文芸ライブラリー〉の使命だと思っている。

販売・企画委員会

委員長 吉岡 聡

販売・企画委員会は前期と同体制での編成となり、今期も小会会員各社の新刊・話題書情報の定期的な発信、全国書店様におけるブックフェア実施と、在庫調査を含めた人文書棚構築、販売促進のためのサポートを委員会活動の中心に据え、委員一丸となって各施策へ取り組んで参る所存です。

外販を含む書店様・図書館様へは、3種の情報ツール「今月の一押しFAX」(月1回)、紙版「新刊案内パック」(月1回)、「高校生のためのブックガイド」(年1回)の定期発信を維持継続しておりますが、今期中に、将来の人文書愛読者のためにと2017年より作成している「高校生のためのブックガイド」の小規模リニューアルを予定しております。

ありがたいことに、各地の有力書店様での定期的なブックフェア開催の機会も多く、今期は新たに紀伊國屋書店様14店舗での常設棚施策「人文書 今月のイチ押し」が6月より本格稼働を開始いたしました。以前より学術和書部様に着手いただいているBookWeb Pro施策に加え、今後、より密な意見交換を行い、次の販売促進方法を模索して参ります。なお三省堂書店様全国主要店での常設棚施策「本の街 神田神保町発！ 人文書 自信のオススメ」も2021年9月開始から昨年2度目のリニューアルを経て継続展開中で、本施策を契機とした大規模ブックフェアを毎年ご開催いただける法人となりました。更に新たな図書館向け施策として、日販図書館選書センター様にて中高生向け企画展示コーナーを来春まで展開します。

販売・企画委員会は、他の2委員会はもちろん、書店様・販売会社様等、関係各所のみなさまと連携・協働し、学術専門書の普及・販売のために尽力して参る所存です。1年間ご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

委員長 吉岡 聡(春秋社)

佐藤信治(大月書店)

副委員長 段塚省吾(紀伊國屋書店)

福土篤太郎(晶文社)

郡司恵太(誠信書房)

栗生圭子(平凡社)

調査・研修委員会

委員長 森 卓巳

本年度の活動の一つ目のポイントは、昨年までと同様に、正・副担当、並びに会員社社員の業務スキルの向上、新たなる知識取得のための研修会を実施いたします。昨年は、一昨年度と比較し、調査・研修委員会主催での研修は少ない結果でしたので、今年度は期初に計画を策定し、年間を通じて偏りがない研修会の実施を心掛けてまいります。

二つ目のポイントは、POSデータサービスの活用やWebでの受発注サービスの導入状況など、昨今の課題案件をアンケートの形式で各社の状況を収集し、全社で共有化する活動を積極的に行ってまいります。

自社の課題に取り組む上で、他社の事例は大いに役立つ情報であり、それが結果として人文会会員社であることのメリットにつながります。そのような機会の拡大を目指してまいります。

また、全国の書店・図書館などへの訪問活動について、前期は会員社をグループ編成し4地域へ訪問いたしました。書店の方々との対面でのコミュニケーション、地域の図書館、新聞社、取次支社への訪問を通じて、マーケット環境を肌で感じることができました。

この訪問地域を選定するのも小委員会の役割ですので、来春の実施に向けて委員会内で熟議し提案いたします。

前期同様、販売・企画委員会、広報委員会と連携し、会員社にとって有益な活動になるよう一年間努めてまいります。

今年度もどうぞよろしくお願いいたします。

委員長	森 卓巳(青土社)	足立 佑(東京大学出版会)
副委員長	東原亮佑(勁草書房)	河内秀憲(筑摩書房)

委員会活動方針

広報委員会

委員長 岩野忠昭

広報委員会の活動は、今期も『人文会ニュース』の発行とウェブサイトの運営という二本柱を例年どおり継続いたします。

『人文会ニュース』は年3回(8月、12月、4月)のスケジュールで発行し、前期も滞りなく発行できましたので、今期もまずはスケジュール通りの発行を目指します。この数年の好評価を励みに、さらに内容を充実していければと思います。人文会の活動を広く知らせるという役割を基本とし、書店や図書館の人文書担当の方に、少しでも興味を持っていただき、なおかつ日常の業務に役に立つようなコンテンツを提供していきたいと考えています。

ウェブサイト(<http://www.jinbunkai.com/>)は、人文会と会員各社の情報提供の場として引き続き内容の充実を図っていきます。前期から始めたTwitter(@jinbunkai)も軌道に乗り、ウェブサイトの記事がX(旧Twitter)に投稿されるようになりましたので、小会の活動がよりタイムリーに発信できていると思います。

さらに前々期からの課題であった『人文書販売の手引き』(第3版)が完成し、ようやくウェブ公開の運びとなりました。お陰様で各方面から評価をいただき、PDFという特性を活かし、より多くの方の手に届けられたと自負しております。

今期も紙媒体とウェブ媒体、それぞれの特性を活かし、かつ補完し合いながら、人文会と人文書の普及、発展を目指しますので、何卒よろしく願いいたします。

委員長 岩野忠昭(白水社)

三木 拓(法政大学出版局)

副委員長 乙子 智(慶應義塾大学出版会)

本橋弘行(ミネルヴァ書房)

2. 春期グループ訪問について
3. 各委員会活動報告
4. その他

●ジュンク堂書店池袋本店「知の森を巡る～人文会フェア」

担当：販売・企画委員会 郡司(誠信書房)

期日：2024/2/10～2024/3/31 1,723冊・3,595,580円

☆4月例会

期日：2024/4/19 15：00～16：30

場所：文化産業信用組合会議室

1. 代表幹事より
2. 57回総会案内
3. グループ訪問および紀伊國屋書店施策について
4. 秋季研修旅行について
5. 委員会報告
6. その他
7. インタージェテクノスフィア様来会 16：30～17：00

株式会社インタージェテクノスフィア

ビジネスインテリジェンスユニットB1三部出版グループ

マネージャー 馬場一朗様

エンタープライズ第二本部 営業企画推進室

シニアマネージャー 神戸秀樹様

●「高校生のためのブックガイド2024」発行

担当：紀伊國屋書店(段塚)・大月書店(佐藤)

17,000部 4月発行

○人文会ニュースNo.146刊行

2024年4月発行(64頁、5,000部)

15分で読む：内田良(「いじめ」はだれに見えているのか)

書店現場から：赤井良隆(大垣書店麻布台ヒルズ店)

図書館レポート：山下樹子(神奈川県立図書館)

編集者が語る：日下部行洋(「別冊太陽」、平凡社)

2023年秋季グループ訪問報告

編集者が語る：三村純（『[完訳版] 第二次世界大戦』、みすず書房）

☆1月例会

期日：2024/1/19 15:00～17:20

場所：筑摩書房会議室

オンライン参加 青土社

1. 代表幹事より
2. 紀伊國屋書店研修会
3. 各委員会活動報告
4. その他 情報交換

○調査・研修委員会主催研修会

「独立書店MAP 2024」

期日：2024/1/25 15:00～16:30 オンライン開催

講師：BOOKSHOP LOVER 和氣正幸様

参加者：会員社 29名

○紀伊國屋書店研修会

「人文書販売の手引き第3版 活用のポイント」

期日：2024/2/16 14:00～16:00 ハイブリッド開催

会場：紀伊國屋書店新宿本店9階イベントスペース

参加者：紀伊國屋書店 64名（現地参加8名）

会員社 32名（現地参加17名）

☆2月例会

期日：2024/2/16 16:10～17:30

場所：紀伊國屋書店新宿本店9階イベントスペース

代理出席 青土社

1. 代表幹事より
2. 春期グループ研修について
3. 各委員会活動報告
4. その他

☆3月例会

期日：2024/3/15 15:00～17:00

場所：東京大学出版会会議室

オンライン参加 春秋社

1. 代表幹事より

☆11月例会

期日：2023/11/17 15：00～16：45

場所：文化産業信用組合大会議室

欠席 青土社

1. 代表幹事・幹事会より
2. 各委員会活動報告
3. その他 情報交換

○古田一晴氏(元ちくさ正文館書店本店長)講演会

「ちくさ正文館と私」

期日：2023/11/17 17：00～18：00

参加者：48名

○特約店グループ訪問

- ・10/11～13 富山・石川・福井グループ：◎筑摩書房(河内)・晶文社(福士)・誠信書房(郡司)・白水社(岩野)
- ・11/13～15 愛知・京都グループ：◎紀伊國屋書店(段塚)・大月書店(佐藤)・勁草書房(東原)・東京大学出版会(澤畑)
- ・11/22～24 群馬・新潟グループ：◎みすず書房(片桐)・慶應義塾大学出版会(乙子)・ミネルヴァ書房(本橋)・吉川弘文館(片山)
- ・11/29～12/1 大阪・兵庫グループ：◎創元社(水口)・春秋社(吉岡)・平凡社(栗生)・法政大学出版局(三木)

(◎班長)

☆12月例会

期日：2023/12/15 15：00～17:10

場所：筑摩書房会議室

オンライン参加 青土社

代理出席 青土社

1. 代表幹事より
2. 紀伊國屋書店研修会
3. 各委員会活動報告
4. その他 情報交換

○人文会ニュースNo.145刊行

2023年12月発行(28頁、5,000部)

15分で読む：京樂真帆子(平安時代の女性たち)

書店現場から：古澤亘(書店マスタ管理委員会)

編集者が語る：岡崎麻優子（「論点」シリーズ、ミネルヴァ書房）
総会報告、活動報告、委員会活動方針

☆9月例会

期日：2022/9/16 14:00～16:30

場所：筑摩書房会議室

オンライン参加 慶應義塾大学出版会・筑摩書房

1. 代表幹事・幹事会より
2. 各委員会活動報告
3. その他
4. 図書館流通センター様来会 16:30～17:00

株式会社図書館流通センター

仕入部 部長 池田和弥様

仕入部 主任 松村幹彦様

仕入部 菅原脩矢様

「図書館市場の現状と23年度施策説明」

●三省堂書店名古屋本店「人文学を彩る書物たち」

担当：販売・企画委員会 郡司（誠信書房）

期日：2023/8/26～10/17 1,161冊・2,255,527円

☆10月例会

期日：2023/10/20 15:00～16:30

場所：筑摩書房会議室

1. 代表幹事・幹事会より
2. 各委員会活動報告
3. その他

○人文図書目録刊行会総会

2023/10/20 16:35～16:50

●金高堂書店 人文書フェア

担当：販売・企画委員会 誠信書房（郡司）

期日：2023/9/11～2023/10/29

本店 412冊・773,100円

朝倉ブックセンター 148冊・348,443円

期日：2023/8～2023/10

外商部 328冊・770,100円

●笠原書店本店「3団体合同専門書フェア」

期日：2023/4/13～6/21 97冊・188,800円

●三省堂書店札幌店「4団体合同人文書フェア 知の森を歩く」

2023/5/8～6/14 245冊・476,580円

☆7月例会

期日：2023/7/21 15:00～17:10

場所：筑摩書房会議室

1. 代表幹事より
2. 各委員会報告
3. その他
4. 大日本印刷様来会 16：30～17：10

大日本印刷株式会社 出版イノベーション事業部 BLMビジネスセンター

BLM企画本部 本部長 矢野俊二様

BLM営業本部 営業第4部第2課課長 森敦夫様

BLM営業本部 営業第1部第1課課長 綱内浩之様

BLM営業本部 BLM戦略部POD企画グループ グループ長 片桐智恵子様
「書籍流通における取組と課題」

○人文書販売の手引き [第3版] 刊行

2023年8月16日 (WEB版のみ)

☆8月例会

期日：2023/8/18 14:00～17:20

場所：筑摩書房会議室

オンライン参加 慶應義塾大学出版会

代理出席 青土社

1. 代表幹事・幹事会より
2. 各委員会報告
3. その他

○人文会ニュースNo.144刊行

2023年8月発行 (56頁、5,000部)

代表幹事挨拶

15分で読む：尾原宏之 (関東大震災100年)

書店現場から：後藤崇 (紀伊屋書店新宿本店アカデミックラウンジ)

図書館レポート：河合郁子 (石川県立図書館)

し、委員会の構成メンバーを選考。

以下の人事を決定。

9 2023年度の役員および各委員会メンバーの発表

- ・代表幹事 片桐 幹夫(みずず書房)
 - ・会計幹事 片山 伸治(吉川弘文館)
 - ・書記幹事 水口 大介(創元社)
 - ・販売・企画委員会 ◎吉岡 聡(春秋社) ○段塚 省吾(紀伊國屋書店)
佐藤 信治(大月書店)・福土 篤太郎(晶文社)・
郡司 恵太(誠信書房)・登尾 純一(平凡社)
 - ・調査・研修委員会 ◎森 卓巳(青土社) ○澤畑 墨(東京大学出版会)
東原 亮佑(勁草書房)・河内 秀憲(筑摩書房)
 - ・広報委員会 ◎岩野 忠昭(白水社) ○乙子 智(慶應義塾大学出版会)
三木 拓(法政大学出版局)・本橋 弘行(ミネルヴァ書房)
- 《◎委員長(幹事) ○副委員長》

10 三役と各委員長挨拶

11 事務連絡

17:00 終了

☆6月例会

期日：2023/6/16 15：00～17:20

場所：筑摩書房会議室

1. 代表幹事より
 2. 秋季研修旅行について
 3. 図書館総合展について
 4. 各委員会報告
 5. その他
- 担当者変更 平凡社

○特約店グループ訪問 中止

●三省堂書店神保町本店仮店舗「第9回 本の街神田神保町で人文書」

担当：販売・企画委員会 福土(晶文社)

期日：2023/3/1～5/7 230冊・396,380円

●山下書店大塚店「レトロな下町・大塚で人文書」

担当：販売・企画委員会 吉岡(春秋社)

期日：2023/3/1～7/8 57冊・111,150円

2023年度(2023.5～2024.4)人文会活動報告(全般)

書記 水口大介

☆第56回(2022年度)人文会総会

期日：2023/5/19 14:00～

場所：筑摩書房会議室

出席者：正担当者18名

14:00開始

総会の開催

- 1 代表幹事挨拶
- 2 総会議長選出
* 総会議長は慣例に従い前年度の書記幹事(水口)が務める。
- 3 2022年度活動報告
 - ア) 会活動全般 (書記：水口)
 - イ) 会計報告 (会計：片山)
- 4 2022年度各委員会活動報告
 - ア) 販売・企画委員会 (委員長：吉岡)
 - イ) 調査・研修委員会 (委員長：森)
 - ウ) 広報委員会 (委員長：岩野)
- 5 会則の改廃
幹事会より会費改定に関する提案あり。
- 6 退会・休会・入会について
休会の報告：日本評論社
- 7 担当者変更の報告
* 今回は変更の申請なし。
- 8 役員の改選および各委員会構成について
 - ア) 代表幹事選出
議長より片桐氏を推挙。全会員賛同にて片桐代表幹事留任を決定。
 - イ) 選考委員選出
出席者による2名連記投票で票数の多い上位4名を選出。
 - ウ) 書記幹事、会計幹事および各委員会委員長名を選出 【別室】
選出された選考委員4名と代表幹事の計5名にて協議。以下の人事を決定。
会計(片山)／書記(水口)／販売・企画(吉岡)／調査・研修(森)／広報(岩野)
 - エ) 各委員会の構成メンバーの選任 【別室】
* 選出された幹事(代表幹事、書記、会計と3委員長)により各員の希望も考慮

2023年度(第57回)人文会年次総会報告

書記幹事 水口大介

2023年度(第57回)の人文会年次総会は、2024年5月17日、「文化産業信用組合・会議室」において全会員社出席のもとに開催されました。

議事は、2023年度(2023年5月1日～2024年4月30日)の活動報告(全般)から始まり、会計報告、次いで「販売・企画」「調査・研修」「広報」の各委員会報告および質疑応答、承認と続き、新年度に向けての役員改選および各委員会所属メンバーを決定し、無事終了いたしました。

代表幹事には、昨年度に引き続き、全会一致で片桐幹夫氏(みすず書房)が選出されました。

会計幹事は片山伸治氏(吉川弘文館)、書記幹事は水口大介(創元社)が選出(いずれも留任)されました。委員会構成は昨年同様、「販売・企画」「調査・研修」「広報」の三委員会体制で会活動にあたることを確認しました。

各委員長(幹事)は、吉岡聡氏(春秋社)が販売・企画委員長(留任)、森卓巳氏(青土社)が調査・研修委員長(留任)、岩野忠昭氏(白水社)が広報委員長(留任)に選出されました。

また、日本評論社の休会が承認されました。

なお、各委員会の構成は、巻末の「人文会名簿」をご参照ください。

人文会会員名簿

〒113-0033 文京区本郷2-20-7 みすず書房内

2024年8月現在

社名	担当者	〒	住所	電話	FAX
大月書店	佐藤 信治	113-0033	文京区本郷2-27-16 2F	3813-4651	3813-4656
紀伊國屋書店	段塚 省吾	153-8504	目黒区下目黒3-7-10	6910-0519	6420-1354
慶應義塾大学出版会	乙子 智	108-0073	港区三田2-17-31	3451-6926	3451-3124
勁草書房	束原 亮佑	112-0005	文京区水道2-1-1	3814-6861	3814-6854
春秋社	吉岡 聡	101-0021	千代田区外神田2-18-6	3255-9611	3253-1384
晶文社	福土篤太郎	101-0051	千代田区神田神保町1-11	3518-4940	3518-4944
誠信書房	郡司 恵太	112-0012	文京区大塚3-20-6	3946-5666	3945-8880
青土社	森 卓巳	101-0064	千代田区神田猿楽町2-1-1 浅田ビル1F	3294-7829	3294-8035
創元社	水口 大介	101-0051	千代田区神田神保町1-2 田辺ビル	6811-0662	3219-7800
筑摩書房	河内 秀憲	111-8755	台東区藏前2-5-3	5687-2680	5687-2685
東京大学出版会	足立 佑	153-0041	目黒区駒場4-5-29	6407-1069	6407-1991
日本評論社(休会中)		170-8474	豊島区南大塚3-12-4	3987-8621	3987-8590
白水社	岩野 忠昭	101-0052	千代田区神田小川町3-24	3291-7811	3291-8448
平凡社	栗生 圭子	101-0051	千代田区神田神保町3-29	3230-6572	3230-6587
法政大学出版局	三木 拓	102-0073	千代田区九段北3-2-3 法政大学九段校舎1F	5214-5540	5214-5542
みすず書房	片桐 幹夫	113-0033	文京区本郷2-20-7	3814-0131	3818-6435
ミネルヴァ書房	本橋 弘行	101-0062	千代田区神田駿河台3-6-1 菱和ビルディング2F	3525-8460	3525-8461
吉川弘文館	片山 伸治	113-0033	文京区本郷7-2-8	3813-9151	3812-3544

代表幹事

片桐幹夫

会計幹事

片山伸治

書記幹事

水口大介

《◎委員長(幹事) ○副委員長》

販売・企画委員会

◎吉岡 聡 ○段塚省吾 佐藤信治・福土篤太郎・郡司恵太・栗生圭子

調査・研修委員会

◎森 卓巳 ○束原亮佑 足立 佑・河内秀憲

広報委員会

◎岩野忠昭 ○乙子 智 三木 拓・本橋弘行

人文会ホームページ <http://www.jinbunkai.com/>

(各種情報/各社へのリンクはこちらからどうぞ)

法政大学出版局

https://www.h-up.com/

縫い目の ほつれた世界

小氷期から現代の
気候変動にいたる文明の歴史

フィリップ・ブローム 著／佐藤正樹 訳
16世紀ヨーロッパを襲った小氷期を乗り越え人々は近代社会の扉を開いた。新たな文化と思想が開花する革新の時代を描いた歴史絵巻！ 3960円

日本人は英語を どう訳してきたか

訳し上げと順送りの史的研究

水野 野 著 日本英語翻訳はいかになされてきたか。「訳し上げ」に抗して「順送り」訳の有効性を打ち出し、訳出技法論に終止符を打つ画期の書。 5170円

〒102-0073 東京都千代田区九段北3-2-3
☎ 03 (5214) 5540 / 表示価格は税込です

誰も取りこぼされない社会へ すき間の哲学

村上靖彦

世界から存在しないことにされた人々を掘つ

* 四六判上製カバー 296頁 税込2750円

知の巨人たちとの対話と格闘の軌跡 批評回帰宣言 先崎彰容

安吾と漱石、そして江藤淳

* 四六判上製カバー 314頁 税込3080円

ミネルヴァ書房

〒607-8494 京都市山科区日ノ岡堤谷町1
TEL075-581-0296 価格税込/宅配可

哺乳類の興隆史

恐竜の陰を出て、
新たな覇者になるまで

ブルサツテ 約三億年前に爬虫類の祖先と分れたグループはいかにして私達になったのか。図版多数。黒川耕太訳 四六判 四六〇円

ハイブリッド・ヒューマンたち

バーカー 障害のある身体と機器の接合がもたらす希望と葛藤を、義足ユーザーの若き作家が探る。川野太郎訳 三〇〇円

「絶滅の時代」に抗つて 愛しき野獣の守り手たち

ナイハウス いまの生物多様性があるのは、情熱的に行動した人々がいたからだ。奮闘の近現代史。的場知之訳 四六〇円

霧のコミュニオン

今福龍太 戦争、パンデミック、気候変動、テクノロジーの暴走：現代社会に抗し、来るべきコミュニティを探る。四六〇円

創られた「天皇」号

新川登亀男著

君主称号の古代史

3850円

天皇という称号はいつから使われるようになったのか。天皇が選択された理由に迫り、呼称の変遷から古代国家の理念を読みとく。

きょうだいの日本史

「日本歴史編集委員会編」古代の天皇から昭和のスターまで、歴史上の兄弟姉妹の多様なあり方から時代を見通す。 2200円

続・沖繩戦を知る事典

古賀徳子・吉川由紀・川満 彰編 戦場になった町や村、市町村史の「戦争編」を基に沖繩戦を立体的に描く。 2640円

吉川弘文館 東京都文京区本郷7-2-8
☎ 03-3813-9151 税込

みすず書房 (税込)

東京都文京区本郷2-20-7 www.mszz.co.jp

慶應義塾大学出版会

https://www.keio-up.co.jp/

ウィーン1938年 最後の日々

オーストリア併合と芸術都市の抵抗

高橋義彦著 首脳会談でのヒトラーの露骨な内政干渉、ナチスによる武力侵攻……。独立を守ろうとする首相たちや、文化人や芸術家の抵抗や亡命を軸に、芸術都市ウィーンの緊迫した日々を描く注目作。◎2,970円

きぬのたすき

絹の褌

富岡製糸場に受け継がれた情熱

稲葉なおと著 いくたびかの消滅の試練を乗り越え、なぜ世界遺産登録に至ることができたのか。世界遺産登録から10周年を迎えるいま、富岡製糸場の「語られざる秘話」の核心に迫る渾身のノンフィクション。◎2,750円

〒108-8346 東京都港区三田2-19-30 [価格税込]
Tel 03-3451-3584 Fax 03-3451-3122

ロシア・ウクライナ戦争と歴史学

ロシア史の再点検をはじめ、「帝国論」「ナシヨナリズム論」などロシアのウクライナ侵攻が歴史学につぎつぎと新たな課題を多面的に考察

47都道府県別ランキングがわかる！ 名字の事典

名字の由来や分布、全国&都道府県別ランキング、めずらしい名字、世界の名字など、名字を丸ごと解説

【監修】森岡浩
【定価】4,180円(税込)

【編】歴史学研究会
【定価】2,970円(税込)

大月書店

〒113-0033 東京都文京区本郷2-27-16

TEL 03-3813-4651 HP otsukishoten.co.jp

ハヤブサを盗んだ男

野鳥闇取引に隠されたドラマ

一筋縄ではいかない犯人との攻防を軸に、卵コレクターや鷹狩り愛好家、ハヤブサレースを楽しむ中東の富裕層など、闇取引の背後にある世界と各国の野生生物保護の取り組みが、臨場感たっぷりに描かれる。
国際ジャーナリストによる、
手に汗握るノンフィクション！

▼定価2750円
(10%税込)

紀伊國屋書店

出版部・東京都目黒区下目黒3-7-10
営業TEL03(6910)0519

家の哲学

エマヌエーレ・コッチャ 著／松葉 類 訳
家空間と幸福
都市にすべてを位置づけてきた哲学は、今こそ家を論じなければならぬ。

税込2750円

バイリンガル・ブレイン
二言語使用からみる言語の科学
アルバート・コスタ 著／森島泰則 訳
脳の中でどのように二つの言語が共存できるのか。バイリンガルの脳を解き明かす。

税込3520円

レイディ・ジャスティス
自由と平等のために闘うアメリカの女性法律家たち
ダリア・リスウィック 著／秋元由紀 訳
法を变革の力に変えてきた女性たちの闘いを描くエンパワリング・ノンフィクション。

税込3850円

けいそ
乱草書房 TEL 03-3814-6861
FAX 03-3814-6854

〒112-0005 東京都文京区水道2-1-1
https://www.keisoshobo.co.jp

発売即重版！

倫理的なサイコパス

ある精神科医の思索

頭木弘樹氏、推薦！

「切り捨ててしまったかもしれない部分をもう一度検討し直せる『倫理的なサイコパス』に私はなりたい」。日氏賞受賞の詩人としても活躍する医師による、ユーモラスで大まじめな臨床エッセイ。

尾久守侑

1870円

晶文社

〒101-0051 千代田区神田神保町1-1-1
Tel.03-3518-4940 Fax.03-3518-4944

ためらいと決断の哲学 一ノ瀬正樹

ゆらぎゆく因果と倫理

伝統的な因果論や倫理学説の緻密な検討をもとに新しいリーダーシップ論の展望を記す。日本を代表する哲学者の到達点。2970円

大統領の精神分析

パトリック・ウェイク

フロイトの著作「ワイルソン」の真実

「ワイルソン」の原本を偶然発見した研究者が精神分析・政治・歴史の垣根を超えて書き上げた、圧倒的ノンフィクション。3960円

辺境のラッパーたち

島村一平編

立ち上がる「声の民族誌」

戦火が絶えないガザやウクライナで、弾圧が続くチベットやイランで、ラッパーの言葉を聞けば、世界のリアルが見えてくる。3520円

青土社

東京神田神保町 ☎03-3294-7829
http://www.seidosha.co.jp/ (価格税込)

心理尺度構成の方法

基礎から実践まで

小塩真司 編 心理学、教育・臨床現場、マーケティングなどで活用される心理尺度の構成に関する基礎から実践まで、検討すべきポイントを丁寧に解説。3850円

大学で心理学を学びたいと
思ったときに読む本
心の科学への招待

日本心理学会監修 富田健太・讃井知 編 最新の研究領域や心理学部での学びなど、イマドキのリアルな心理学の姿について、日本心理学会・若手の会のメンバーが語り尽くす。1980円

パンデミック、災害、そして
人生におけるあいまいな喪失
終結という神話

ポーリン・ボス 著 瀬藤乃理子 他訳 「あいまいな喪失」研究の第一人者の最新刊。喪失と悲嘆の根幹から、パンデミックで顕在化した人種差別等を解説。2640円

誠信書房

Tel 03-3946-5666

東京都文京区大塚 3-20-6

創元社

ストレスの歴史

科学的研究の発展と社会・文化の影響

マーク・ジャクソン 著 丸山総一郎 監訳

A5判・上製・五五二頁

定価8800円

キヤノンやセリエらの生物学的研究からラザルスをはじめとする心理学的研究まで、ストレスの科学的研究の発展の歴史を社会・文化的な文脈に位置づけながら明らかにする。

大阪市中央区淡路町4-3-6 (税込)

TEL06-6231-9010 Fax06-6233-3111

千代田区神田神保町1-2 TEL03-6811-0662

2024年8月25日発行 年3回発行 第147号

発行所 人文会

〒113-0033 東京都文京区本郷2-20-7 みすず書房内

編集協力 アジュール・プロダクション

印刷 中央精版印刷株式会社

〈非売品〉